

淑戸内晴美
薔薇館

講談社

© 1971

HARUMI SETOUCHI

第1刷 昭和46年2月20日

定価 450円



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

薔薇館

著者 瀬戸内晴美

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

電話東京(945)1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

0093-148782-2253 (0) (文2)

薔薇館・目次

池 の 月	心 変 り	遠 い 春	毒 の 沼	夢 ふ た た び	海 鳴	乱 れ 雲	秘 密	夜 の 海	黒 い 夢	花 の 散 る 道	め ぐ り あい
103	94	85	76	67	58	49	40	31	22	14	5

薔薇の碑銘	告 白	消 えた虹	秋 篠	玉 か ず ら	悪 夢	聖 夜	迷 い 鳥	遠 い 火 事	折 れ 葦	砂 の 城	若 い 獣
209	200	191	183	174	165	156	147	138	129	120	112

薔
薇
館

装帧 山本美智代
写真 渡辺 眸

めぐりあい

エスカレーターでブラットフォームに上っていくと、さっきの赤帽が、白い大小のトランクと真赤な丸い帽子箱をさげて七号車の標識のさがつた下に立っていた。

新幹線のブラットフォームをとり囲む硝子の壁越しに見える京都の空は、今日も明るい桔梗色に晴れ渡っている。

ブラットフォームから見下す眼下に、低い雑然とした醜い建物の凹凸が、地平をせまくぎっていた。昨日まで三日間、歩いた京都の郊外の美しい山々や野のイメージとはあまりに縁遠いその醜さに、御馳走のあとに、いきなり腐ったバナナを皮ごと出されたような印象を藤波梢は受けた。

ブラットフォームにいる人々の視線が、電波のように伝って、誘いあい、ふたりの女づれに集ってくる。

藤波梢と雅美の母娘は、人の目には姉妹にも見えないだろう。容貌に似たところが全くないからである。梢も雅美も、こういう人の視線には馴れていて、もう無感覚にそれを無視するほどになっていた。

ふたりが人目をひく理由は、容姿の美しさよりも、着ているものが人目を集めるのかもしれないかった。かといって、ふたりがいつでも、人目をそばだてるような派手なものや、大胆なものを身につけているわけではない。今日も、梢は、結城の着物の上に、紫根染めの紬の道中着仕立のコートをつけているだけだった。コートの衿に目のさめるような紫の縮緬をつけてあることをのぞけば、さほど派手な身支度ではなかった。

雅美は白のニットのワンピースを思いきって短く着、その上にこれも白のコートを羽織っている。旅行に白づくめという贅沢さが、琥珀色の雅美の顔をいっそう清潔に際立たせていた。

「匂い袋は、いれたかしら」

梢が娘の方へふりかえって訊いた。

「ええ、小さい方のトランクへいれておいたわ。久須美のおばさまの分は別にしてあるわ」

「それならいいの。何だか、ふっと、置き忘れてきたような気がして」

「ちゃんと、ホテルの箆笥の引きだしもあけてみたし、バスルームの鏡の前の棚も見てきたわよ」

梢がひとりで旅をすると、指輪をバスルームの洗面所の棚におき忘れてきたり、ショールを、ホテルのロビーに置き忘れたりすることが始終だった。

「いったい、おかあさまは、そんなにおっとりして、よくも今まで生きてこられたわね。あたしがいないとどうなるのかなあ」

雅美があきれたようにいうと、梢は、雅美の目にも美しいと見惚れるような初々しい頬の染め方をして、

「だって、おとうさまが、よく面倒みて下さったから、あの頃はちっとも不都合じゃなかったのよ」

という。梢の夫、雅美の父の藤波敬之介が急性の肺臓癌で逝ってから、もう三年がすぎていた。

気がついたら、もうそこへ「ひかり」がしのびよっていた。音もなく入ってくる列車は無気味で、それをみつけた時の、ぎくっと、背筋のふるえる感じに、雅美はいつも馴れることが出来ない。

赤帽が荷物を運びこんでくれた後から入っていくと、七号車の中程にすでにトランクが荷物棚におさまっていた。

入ってくる時も発車の時も「ひかり」は人に気づかせない。

ふたりが席に落ちつき、コートを棚にのせ、坐り直したら、もう、列車は京都の町を出外れようとしていた。

その時、通路の背後から歩いてきた男が、ちょっとわ

ざとらしいしぐさで、ふりかえり、ふたりの方を見た。梢も雅美も、膝の上に週刊誌をひろげたところで、男の視線に気づかなかった。

「藤波さん」

男に声をかけられて、梢が顔をあげる前に週刊誌を膝からすべり落した。声に覚えがあった。

「まあ」

梢は顔をあげ、はじめて気づいたように、つくった声をあげた。

「さっき、入っていらっしゃる時、後姿を見て、おやつと思っただけです。でも、人ちがいかもしれないと思っ

て」

「いつ、……いつお帰りになりましたの」

「え？ ああ、カナダからです。もう三年前から帰っていますよ」

「ちっとも、存じあげなくて」

梢は、つとめて他人行儀なことばを使おうとする。隣の雅美が、目立たないように母の腰を指で突いた。

——だれ？ ——

と、その指がいつている。

梢は男を見上げたまま、

「紺野さん、長女の雅美でございます」

と、紹介した。

「ああ、お嬢さまでしたか……御長女とおっしゃると……あの時の……」

紺野がことばをのみこむようにした。

「はあ、あの節はお世話になりました」

梢が紺野のきれたことばをおぎなうようにいう。

「そうですか。いや、もう、自分の年をとってしまったことを感じますねえ、こんなに御成長なさったのを見ると」

「あの、そちらさまは？」

「は？」

「お子さまは？」

「いないのです」

「まあ、それはお淋しいですわね」

「あんまり長くお逢いしなかったので、いろいろ説明が必要な様ですね。ぼくはずっとまた、ひとりなんですよ」

「あらっ……それは……」

今度は梢の方がことばをのみこんだ。車内売りの車を少女たちが押して通路をやってきた。

紺野は、その車に押される形で、

「じゃ、また……ちょっと電話をかけてきます……」

と口の中でいい、背姿を見せて立ち去っていった。

さっきから気がついていたが、びんのあたりにまじりはじめた白いものが、首筋の上にも、白くまだらに散っ

ていた。それでも、がっしりと張った厚い肩のあたりや、頼もしそうな背の表情には、往年の紺野がいた。

梢は、不思議なめぐりあいにもまだ波立っている心を静めようと、窓外に目をやった。

何か、訊くだらうと思っていた雅美が、やはり声をかけてきた。

「だあれ、紺野さんて」

「なくなったおとうさまのお友だちよ」

「カナダにいったって？」

「ええ、バルブの会社がカナダにあって、そちらへいらっしゃってた筈だったの、あたしはまだ、カナダにだとはかり思ってた」

「あの時の……って、あたしのことってたけど、あの時って、何時のことよ」

「え？」

梢は不意をつかれたように、目につくほど狼狽した。

「紺野さんに雅美の名前をお父さまが相談をしたからよ。あちらのお父さまが姓名学に凝っていらしたからじゃなかったかしら」

嘘というのは、どこかに本当がまじるものだ。梢は心の中で苦笑いする。雅美のことを亡父の敬之介が紺野邦秀の父に相談にいったのは本当だった。しかしそれは、名前のことではなく、もっと法的な問題だった。紺野の父は有名な弁護士だったからだ。

「すてきな人ね」

「誰が？」

「いやだ、今の方よ、紺野さん」

雅美が屈託のない声でいう。

「ああ、そう……そうお？　そうかしら」

「いやあね、おかあさま、何だか変みたい、すてきだわあの方、ちょっと陰影があつて、やさしくて、それに渋いわ」

「男の渋さなんかには惹かれる年じゃないわよ雅美は」

梢は早く紺野との話題を打ちきりたい想いと、もっと、雅美に紺野のことを喋らせてみたい気分が等分にあつた。

「そうじゃなくてよ。あたしのような若い者は、ああいうロマンスグレイに一番弱いだよ」

「パパに対する郷愁みたいなものじゃない、それは」

「そうかもしれないけど、もっと積極的な関心よ」

「おお怖い。あんなおじいちゃまに積極的関心なんかどうか示さないでちょうだい」

梢は自分の声が、いやに浮々してはすっぱに聞えると思った。やはり、突然の紺野の出現には相当動揺していると思つた。

——またひとりですよといったのはどういうことだろう。奥さんはなくなつたのだろうか。それとも、何か事情があつて別れたのだろうか。でも一分のすきもゆるみ

もないあの身だしなみは、女の愛情がゆきとどいていた。男がひとりでいるとああはいかない筈だ。それとも、外国で長く暮した人は、ああいうふうに自分を疑けられるのだろうか。

「ねえ、やつぱりあたし、断つちゃおうかな」

雅美が、週刊誌を輪にして、その先に顎をのせるようにつぶやいた。

「どうして？　急になぜ、そんなことい出すの」

梢は顔色をひきしめて雅美の方をみかへつた。雅美は長いまつ毛をそらせた横顔を動かさず、

「急じゃないわ」

とつぶやく。

「ずっと、考えてたのよ、昨日から」

「だって、昨日、ふたりでゆっくり逢つて、いろいろ話を通じたんじゃないの、あなた、野口さんに送られてホテルへ帰った時、とても愉しそうだったわ。これはうまくいきそうだと思つたのよ。とても前の日、お見合いではじめて逢つたようなぎごちない雰囲気はなかったことよ」

「そりゃ、おかあさまの若い頃と、今とはちがうのよ。

あたしたちはお見合いなんて、そう重大に考えてやしないもの、何度逢つてみてもべつだん、こちらがちびるわけでもへるわけでもないでしょう。一日や二日話してみたり、歩いたりしたくらいで、一人の人間なんてわかり

っこないわよ。どうせ、逢うなら、その時間、うんと愉しくつかわなきゃ損するみたいだから、そりゃ、それにエンジョイはするのよ」

「でも、厭な人となら、どんなことだってエンジョイなんか出来ないんじゃないかしら」

「そんなことないわ。相手に無関心なら、かえって、後腐れなく、さばさば愉しめるじゃないの」

「だって、相手はお見合いした人ですよ、無関心ってわけじゃないじゃないの」

「あ、そうか」

雅美があっさり認めて自分から笑いだしたので梢も拍子ぬけがしてしまう。

「でも、野口さんなんか、今のおじさまなんかにくらべるとほんとにちゃちゃよね」

「だって、そりゃ、年齢がちがうじゃないの、紺野さんはババと同じくらいの年だし、野口さんはまだ三十にならないのよ。当然じゃないの、比較する方が可哀そうよ」

「そりゃそうね」

雅美はあっさり認めて、

「ま、もう少し、様子見るか」

と、まるで他人事のようにひとりごとをいう。

今度の旅行の目的は雅美と野口良治の見合いだった。表面は、久しぶりで京都の紅葉を観に行くということにしておいた。

世話役は、敬之介の従姉にあたる正代だった。正代は自分の家へ泊れといってくれたけれど、梢はかえって気がねだからと、ホテルに部屋をとったのだった。

野口良治は、京都の古美術商の長男で店を手伝っていた。まだ両親が健在なので、大学を出て二年ばかり東京の青山の美術商へ見習に住みこんだ上、京都へ帰っている。

結婚したら、また二年ばかり、ローマを中心に、外国で美術の勉強をしてくるという予定がたっていた。語学の出来る、良家の娘を嫁にということで、良治の母のお茶友だちの正代を通して、雅美に白羽の矢が立ったのだった。

雅美はミッション系の中学でフランス語をやり、この春大学の英文科を卒業していた。

見合いの席は嵐山の料亭に設けられていて、雅美は当日は、正代の注文で和服を着た。

個性的な顔立ちの雅美は、和服より洋服の方が自信があったが、スタイルがいいので和服も結構着こなせた。

梢の選ぶ雅美の和服は、わざと、派手な色をさけ、青や緑を基調にしてある。その方が、雅美の琥珀色の皮膚のなめらかな輝きをひきたて、ベルシャ猫のように優雅で鋭い雅美の魅力をひきたてるのを計算していた。

当日、雅美の着た着物も、トルコ玉のようなブルーを基調にして、白と紺と銀の鶴が裾から腰まで飛んでいる訪問着だった。

さり気なくしたいというので、先方は本人と、母親だけ、こちらにも、雅美と梢だけで、仲人役の正代がそれに加わっただけの小人数の会食だった。

会話は母親同士と正代の間でほとんどかわされ、当人の若いふたりはほとんどだまっていた。

帰り、先方の母親のはからいで、良治の車に、雅美だけをのせ、他の三人は料亭でよんでもらったハイヤーで帰り、ふたりの話し合うチャンスをつくった。

翌日、もう一度、良治がホテルに迎えに来て、雅美だけを車にのせ、紅葉狩りという名目で、郊外めぐりをした。梢は正代といっしょに別行動で、やはり紅葉を観に出かけた。

その二度のチャンスで、良治という人間を見極めろということは無理だけれど、先方では気にいって、すぐにも即答で返事をききたいとせまられていた。

雅美は、もっとつきあいたいというので、梢は雅美の意志を尊重した。

「そんな尊大なこと、嫁さんの方はいわない方がいいのとちがいますか。時節がなんぼう変わったいうても、やっぱり、京都は旧い町ですから、嫁さん側は、受身の方が床しがられます」

長い京生活で、ことばに京なまりをいれながら正代がいつのつた。

「それでも、やはり、大切な結婚ですから、本人の意志を尊重してやらなければ」

梢も、正代にいいまかされまいと真剣に答えた。

「雅美ちゃんは、ああ見えてもしっかりしてて、妙なボーイフレンドなんかないとあなたが保証したから、この話もすすめたんですけれど、見合いて、もっとつきあいたいなんていうところをみたら、相当すれてますね」

「あら、そんなことありませんわ。そりゃ学校友達ちゃ、いろいろ、ボーイフレンドがないことはありませんよ。うちへも見える人が何人かいます。ただ、今の娘は、友だちは友だち、結婚は結婚とわりきっていて、私たちの娘時代みたいに、男とつきあうと、もうすぐ恋愛をとばして、結婚にむすびつけたようなのはちがっているんじゃないかしら。雅美もそう考えているからこそ、このお見合いに応じたので、あの子ははっきりして、嫌なことは、たとい私や、あなたのことでも聞きませんもの、でもそれで、男にすれているなんてことはいえないんじゃないでしょうか」

梢とは三つくらいしか年がちがわないのに、いつまでも若く見える梢とは十以上も年上に見える正代は、その時、表情をあらためていった。

「梢さん、あなた、生きぬ仲だからって、あんまり雅美さんを甘やかしすぎてやしませんか。何も、赤子の時からひきとって育てた子だもの遠慮なんかすることありませんよ」

「おねえさま！」

梢は呼びなれていることばで正代に鋭い声をかえした。

「どうか、そんなことおっしゃらないで下さい。あの娘のことは、戸籍の上でも、誰にも疑われないようにしてあります。識^しっているのは、おねえさまのような、ごく身内の者だけです。本人にも、いつか話そうと思つていますけれど、もうその必要もないのではないかと思うのです。今度の縁談だって、別に嘘を通すつもりじゃありませんけれど、このまま、すすめていただけたらというからあたくし……」

正代は声をつまらせた梢の後をうけて、

「もちろん、先方にそんな話出来やしませんよ。お宅の娘と思つてからすすめられるので、実は実母は新橋の芸者でなんていえますか」

梢は白い顔をいっそう白くさせ、正代の前で顔をひきしめてしまった。

やはり、正代の持ちこんでくれた話は、はじめから断るべきだったかと後悔した。こういうことを正代が考えている以上、いつ、このことを正代の口から故意にばらされないともしれない。

それでも、雅美が、良治と二日出逢って、それほど不快がってもしなかったもので、梢は自分の感情を押えこんでいたのだった。

正代からあんなことをいわれたため、つとめて想いだすまいとして、また歳月がすっかり、それを忘れさせかけていたあの頃のことを、昨日から梢はしきりに思い出すようになっていた。

そんな折も折、いきなり、紺野にめぐりあうなんて……。紺野とは十数年、逢っていないかった。紺野のびんの白髪に自分が気づいたように、紺野も自分の中に、どんな老いを発見しただろうか。

向うの自動扉が開き、紺野があらわれた。電話をかけ、ビールでものんできたのか、紺野の目許が目につくほどうすく上気している。

紺野が梢たちの席に近づくのを待っていたように、いきなり、雅美が立ち上った。

「おじさま、こちらへいらっしゃいませんか？」

雅美はそういつて、空^あいていた前の座席を、ぐるっと廻転させ、自分たちの方へむけた。

「いや、これはどうも」

紺野は恐縮して、どうしようかというように、梢の顔をうかがった。梢は仕方なく、

「どうぞ、およろしければ」

といった。

紺野は、ふたりにむかいあって、雅美の前の座席に腰をおろした。

「薔薇園はどうなりました？」

紺野が、ゆったりと脚を組むと、梢の方へむいて訊いた。

「はあ、今は、前ほど手が廻らなくなりましたけれど、つくってあります」

「ほう、それは結構ですね」

薔薇は敬之介が昔凝って、家の背後の庭も、すっかり

薔薇園にしてしまい、あらゆる種類の薔薇を集めて、つくったことがあった。女と同じで、凝りだすとたちまちのぼせあがるくせに、飽きのくるのもまたいたって早い。敬之介は、薔薇の時も二三年は、夢中になっていたが、いつのまにか、次第に人まかせになり、終いには、かえりみなくなってしまう。せっかくの苗が惜しいと、いつからか、薔薇づくりは梢の仕事にまわっていて、そのため、梢は飽きも凝りもしない敬之介の女遊びから受ける、様々な心の屈折を、花に慰められ、花に封じこめて、耐えることが出来たようなものだった。

「はじめは、何でも、私が彼に手ほどきして、最後はい

つもお株をとられる段取りでした。薔薇もそうでしたよ」

紺野がいう。

「あら、薔薇もそうでしたの」

梢がちよつと驚いた声をだした。

「女の人も？」

それは雅美がいった。

「まあ、雅美ったら……」

梢が赫くなつてたしなめた。

「いや、こいつはまいったな」

紺野はかえって嬉しそうに笑い、

「そういわれてみると、そんなこともあったな」と、ことばを濁した。

「ずっと、カナダにいらつしやいましたの」

梢が話題をかえるようにいう。

「いえ、終りの三年は、ニューヨークにいました」

「ずいぶん、お目にかかりませんでしたかね……」

「そうですね、しかし、あなたはいつまでもお若い。あの頃と全くかわらない。年があなたの上だけ素通りしているようです」

紺野がいうと、そんな言葉も気障でなく聞えるところがあつた。

「まさか、外国に長くいらつしやると、お口がうまくなられますのね」

「いや、お世辞じゃありませんよ。ね、お嬢さん」

紺野は雅美の方に扶けを需めるようにいう。

「ええ、母は若いから、いつも姉妹かといわれますわ。おじさま、雅美と呼んでちょうだい」

「いや、これは失礼、雅美さんは真に沙に美しいですか」

「いいえ、雅やかに美しいですわ」

自分で説明したことはに照れて、雅美がくすりと笑って肩をすくめた。

「おじさまのお父さまがつけてくださったんでしょ、忘れるなんてひどいわ」

「は？」

紺野がきょとんとした表情をする。梢は思わず、軽く、自分の足の方にのびていた紺野の片方の靴を踏んだ。

「ああ、そうだったかな、いやもう、何もかも忘れてしまつて、だめだな、こうなっちゃあ」

紺野の笑顔が梢の方にむけられた。同意を需めるふりをして、紺野の目はす速く、梢の目の中のもものを読みとろうとする。

——これでいいんですか？ ——

——ええ、どうもすみません ——

——いいんですかね、また秘密がひとつ出来ましたよ、われわれの間に ——

——お目にかかるんじゃないやなかったのに ——

——いや、もう離さない、覚悟していらっしやい ——
無言の会話がふたりの間に光りのような速さでかわされた。

梢はやはりこうした声のない会話をかわしあっていた昔の歳月が、虹色にかがやきながら、一挙にここへたぐりよせられてくるのを感じた。

花の散る道

その頃、梢はまだセーラー服の女学生だった。ミッシェン系の女学校だったので、セーラーの型もスマートで、髪型は府立などと同じ、自由だったから、梢は日本人形のように肩のあたりでぶつりと切りそろえ、前髪も、真直眉の上に一文字に切っていた。

この頃バリ帰りのファッションモデルなどがやりはじめ、一時はクレオパトラ型などいわれた髪型だった。それが、桜色で下ぶくれの、目の大きな梢の顔に似合い、思わず人がふりかえるような美少女ぶりだった。

江戸時代からの老舗を誇る化粧品問屋「たつみや」が明治になってから外国式の化粧品の製法も取り入れ、どこよりも早く薔薇水というピンク色の化粧水売りだしで、それが当り、今では日本でも有数の高級化粧品会社になっている。

梢の父の伝次郎は入婿だったが、梢の祖父に見込まれただけに、事業の勤が天才的によく、ますます社運を發

展させていた。それでも、戦時色が次第に濃くなるにつれ、藤波化粧品のような高級化粧品は、次第に製造の自粛を要求されるようになっていて、事業は困難になっていた。

「ばかなことだ。戦争で暗い時勢だからこそ、女たちは花のように美しくしていなければならぬのに」

伝次郎は、原料の輸入が困難になったり必要な薬品の配給を大幅にけずられたりする度に、青筋をたててどなりちらしていた。

「女が美しく粧えない時勢なんか、いいことがあるものか。平和とその国力のパロメーターはその国の女の美しさだよ」

そんな意見を晩酌の時もらしては、家ではいつでも妻や娘、はては女中たちにまで、派手な袂の長い着物を着せていた。

そんな父の態度に梢はかえって反感を持ったくらいで、戦争中なのにと、派手な普段着の袖に手を通す度抵抗と心の痛みを感じたくらいだった。

伝次郎はまた、

「化粧品屋の女房や娘が、みつともなければその化粧品をかう客があるものか」

と口癖にいい、妻や娘に美しくしていることを、口やかましく要求した。

母と同じで梢がまた一人娘なので、藤波家は次の代も